

「 集中豪雨の条件と目安 」

古来からの伝承で恐ろしいもののたとえに「地震、雷、火事、親爺」がある。現在でも親爺以外は健在、梅雨時はさらに集中豪雨による災害が追加される。この集中豪雨が発生しやすい気象条件は、次の三つが重なった場合が多い。

第一は、大雨をもたらすこととなる湿った空気が次々と集ってくる（収束）こと。

第二は、集った空気が短時間に上昇（上昇気流）して、活発な雨雲や雷雲へ発達すること。

第三は、大雨が降っている場所が殆ど動かないこと（停滞）である。

この集中豪雨の可能性を農家や一般の方が、ある程度の予想をする目安が三つある。

第一は、テレビの天気概況や気象解説で「太平洋高気圧の西の縁（へり）をまわって暖かく湿った風が流れ込んでいます・・・」などの表現に注目する。

第二は、梅雨前線付近で発生している巨大な積乱雲（気象衛星ゴーズの画面で白く輝いている雲の塊）と山脈に吹き付けている風向き（南寄りかどうか）や風速で、上昇気流の存在と強弱を推測する。

第三は、経験と詳細でリアルタイムの情報が要る。なぜ、雨雲が数時間も同じ場所に居座って大雨を降らせるのかの判断データのこと。これには、地元気象台などから発表される「記録的短時間大雨情報」や「レーダーアメダス解析雨量」が参考となる。

もし、自分の住んでいる最寄りの山や川の上流に、記録的短時間大雨情報や警報が発表された時は、要警戒。たとえ現在小降りでも、災害を最小限度に抑えるために、早めの大雨対策をとることが大切。

（ 気象情報システム株式会社 高 津 敏 ）